



平和研講演会シリーズ 2006
2006 IIPS Lecture Series
“国際的な信頼醸成と我が国の役割”

英国国際戦略研究所(IISS)研究部長
パトリック・クローニン博士
「核実験後の北朝鮮と北東アジアの安全保障」
2006年12月12日 於:グランドヒル市ヶ谷

世界平和研究所は、日本財団の協賛を受け、本年12月12日、グランドヒル市ヶ谷にてパトリック・クローニン IISS 研究部長の「核実験後の北朝鮮と北東アジアの安全保障」に関する講演を開催した。

講演の冒頭、クローニン部長は、紛争の例として中東問題について触れ、2001年に起きた9.11米国同時多発テロによって、米国の戦略的関心はアジアから中東、そしてテロ対策へと移り、911テロ以後の5年間で世界は変貌したと指摘、さらに以下のように続けた。



北朝鮮問題については、北朝鮮への米国の不信感が根強く、米国は、北朝鮮に常に二者択一の厳しい選択を迫ってきた。だが、金融制裁はシンボルとしての意味はあるにせよ、大量破壊兵器プログラムを破棄させるだけの実効性を有するものとはいえない。また、米国においても、北朝鮮のレジームチェンジを促すのか、あるいは政策変更を促すのかという政権内部での緊張

が存在するのも事実である。

現在の北朝鮮に対しては、重要な5つの構成要素、すなわち、抑止、封じ込め、交渉、同盟運営、国家づくりを網羅する形でアプローチをさらに広げて行かねばならないであろう。

とりわけ、封じ込めについては、ミサイル、核開発の双方について緊急性の高い問題である。むろん、制裁の方が効果的であるかもしれないが、同時に対話の可能性を残し、同盟関係の運営管理を強化するこ



とがきわめて重要である。

さらに、現状からみる限り、北朝鮮には内部崩壊など地域の不安定化要因となる可能性が存在する。従って、地域において台頭する中国の存在は無視できないし、主要国での調整は必要である。米国の力は圧倒的ではあるが、米国が単独で決定を行い実行することは賢明なやりかたとは言えない。

また、国際社会において、日本のような力を持つ国が世界にない以上、日本の力は必須である。日本のような国が世界の安全保障において完全に脇に置かれていることは望ましいこととはいえない。日本が進んで貢献を行ってくれることが必要である。

米国は、今後数年間にわたり現実の問題に対し手をこまねていることはありえないし、必ず必要なリーダーシップを発揮していくこととなる。日本が、米国と協力し、その持てる力を国際安全保障に対し提供し貢献することを願っている。

クローニン部長は、以上のような幅広い指摘を行った上で、会場からの質疑に応じて講演を締めくくった。

